きらきらこがれてこがして

成人
R18

黒羽(ゆに)×灰島(ちか)

2.43清陰高校男子バレー部
UNOFFICIAL FANBOOK by EMORI(BIOTOFU)

100
COMIC MARKET
FRIENDSHIP FOREVER

もくじ

p.1　『きらきらこがれてこがして』

江森

p.31　『未だ熱りさめやらぬ』

行間さん
pixivID：36633024

p.45　おまけ再録＆奥付

いつもお世話になっております。江森です。
初めまして、だとしたらようこそゆにちかの世界へ。ぼくといっしょに覗きに行こうぜ！！！
夏らしく夏祭りでのゆにちか(幼少～高校～大学)の様子を収めました。ちかちゃん黒羽のお陰でちょっと情緒育ち中な感じでお送りします。
よろしければご査収ください。
なおようやく初めてのゆにちか18禁です。ちかちゃんかわいいね。作画時間と進行の兼ね合いにより黒羽がちゃんとしてたり話が飛んだりしてますので、各位で脳内補完よろしくお願いいたします。あなたの力を信じてるっ♡

青小田民でゆにちかヤクザモンペ保護者会々員・江森

きらきらてかれててかがして

成人
R18

黒羽（ゆに）×灰島（ちか）

2.43清陰高校男子バレー部

UNOFFICIAL FANBOOK by EMORI（BIOTOFU）

100 COMIC MARKET FRIENDSHIP FOREVER

ひゃあ
こわいよぉ
ぎゅっっ
っと
前が見えなくなっちゃうな
はは。
のぶくん
足元気いつけて
チカちゃん
もう大丈夫やよ

ちょっとずつ
目ぇ開けてみね
うん
ほら

まぶしい…
ふふ
きらきら
しちょるでねぇ

ん…

わあー

…じ…

なぁなぁ
おかあちゃん！
おとうちゃん！

おい…

キラキラしとって
ひっできれいや！

灰島ぁ～

おい～

――あ
黒羽

あっくろば
やねぇわっ

なんなんや

着付け終わったら
ひとりで先に
言ってまうしもー

とりあえず往来の邪魔になっとるで

ほれ

ダッ

うん

ドンドン

よっしゃ～！何から遊ぶかのぉ～！

ピロロロ

遊ぶのかよ小学生か

ドドン

いいやろ別にぃ～！

LUCKY PUNCH BOX

金魚すくい…
生き物系はのぉ…
うちの池に放すと鯉に食われてまうし…
あんずあめ…
お！ヨーヨー釣り！
水風船…マジで子供かよ…
どうや灰島?!
ほ〜〜
もしかしてこういうんは苦手なんけ〜〜?

ちま…
※必ずもらえる1コ
どっさり
なんでや
バレーと同じ水流と他の風船の動きを観察して予測
ターゲットを迎え入れるように捉えて一気にしとめるな？
できんわっ

瞬きする間もない世界で

物理も精神もぜんぶ駆使してひとつのボールをつかまえるんだ

バレーってすげえよな

帰ったら
パス錬しよっせ

こんな夜に？
浴衣でか？
ふん…
やる

ふはっ
言うと
思ったわ

ドンドン
ガッ

腹減った
なにか食いたい

ほやのぉ
おれ広島焼き～

ドドンドン

ピィ
ピィ

おれもそれ
あとあんず飴

あ
おれも！

だから
ずっと、

満足
しようと
すんな
―灰島

ポタッ

サァ…

黒羽せんぱーい
置いてってまいますよー

おー
すまーん

どーしたんスかもー

すまんってぇ〜
おわびに後でサーブ錬してやるでのぉ♡

やったー♡
て！

ふつー食いもんとかやと思うんスけど?!

フハハハばれたか

ふつーはそうやよなぁ〜

黑羽

うおおお〜!!
浴衣の灰島久しぶりやぁ
自分で着付けできたんけ?!
ばーちゃんがやってくれた
公誓はいっけぇのお台使っても届かんわ〜
教えてくれればばーちゃんがやりたいんやって自分でやるって
なんでコンタクトなんや?!
祭り終わったらパス錬するだろ
??
…灰島は
浴衣姿もかっこいいんよなぁ…
…っ
…お
おれはちょっとムカつくけど
ふっ

えー なんでやー

だってこの浴衣 おまえが高1の時に 着てたやつじゃん

ほやから新調 しよて言ったんに

…そうじゃなくて

ん？

…身長

あー

ふはっ

セッターで 186センチもあるのに 相変わらずやのぉ

くそっ… 3cm差の余裕…

あ〜〜

ちらっ

ちゅるっ

ふん…

ガブッ
ウ
ヒィ
やる…
ガタ ガタ ガタ
ハア ハア
ガタ ガタ
ハア ハア
バーカ
こいつならやる…
もぐ
もぐ
ドンドン カッ カッ
ピンポン パーン
間もなく～
予定通り～
打ち上げ花火を～
行います
ドドン ガッ
おっし！
祭りのメは…
ヨーヨー釣りじゃ！
祭りのメ…
ヨーヨー
300円

んあああ
フンス
やっぱ灰島に勝てん〜！
たのしい
おまえも自力で結構取ってるじゃん
ん…

今…
おまえが隣にいるんが
ひっでもんに幸せすぎて…
それだけでもういいわ

ドクン
…
ドクン
ぎゅ
ぐいっ
わっ
ドクン
セックス
今
したいん
だけ…ど

セッ…
いっ…

ちょ
おま…
なぁ…おまえは
したくねえの
セック
ああああ
ああああ
ああああ
おばちゃんコレ
預かっとってっ
はいよ〜

あのなぁ
灰島――

――っ

ちゅく

んぐ

ちゅ

んっ
まて

ちゅっ

っ灰島！

っは

どうしたんや？
何か不安なこと――

ぎゅっ
…灰島は
浴衣姿もかっこいいんよなぁ…
ふっ
ぽぇ…
…
おまえの方がかっこいいし
今、おまえが隣にいるんが
ひっでもんに幸せすぎて…
ぽぇ…
…
おれだってすげぇ幸せだし
っ……
ぎゅ…

わーあああぁ
〜〜〜っ
「好き」の伝え方不器用すぎか〜!!!!押し倒してぇ〜!!!!
でもまぁよかった
おれも今すぐおまえとくっつきたい
…うん
けどの怪我させたないし、それに…
とにかく部屋に戻ってからしよっせ
……
ふるふる
…はぁ…
ほしたら
ここに手ぇついとって
？
うん

ごめんの

今(そと)はこれで我慢や

？

なに…

くっ!!!

ふふっ

っあ…♥

い、息…っ

ひくんっ

ひくっ

ひくっ

…素直で

敏感で

ばるんっ

ぶたんっ

ぐぃっ

トロン

きゅん♥

きゅん

スン…

灰島のにおい

触る前からガン勃ち…

ちゅ
あっ♡
びくん
ちゅうううう
ちゅっ♡
きゅっ♡きゅん♡
ぷく
ビクッ
はっ
とろっ..
ビクッ
灰島は
はあぁ♡
ほんっと
かわいいのぉ♡
ビクッ
ビクッ
ぐぐぐっ

ビクンッ
ビクンッ
灰島
…っ
射精(だ)して
ぬちゅうう
ひっ
ビクン
あ
あっ
あっ
ぬちっぬちっ
きゅ
あ

じゅぽ
あっ
ちゅぽ
ぬちっ
んっ
んあ
ビクッ
ビクッ
ビクッビクッ
きゃうううう
[redacted]
ぐりゅ
ぐりゅ
ぐりゅ
ぐりゅ
やっ
ここ
あ
ここ
くっ
くっ
ぐりゅ
ぐりゅ
くろ…ばっ
ぬちっ
あっ
ビクッ
ぬちっ
じゅぽ
ぬちっ
じゅぽ
くろっ
ひっ
イっ
イく…っ
も…
あっ
っでる…ッッ
ぬち
ぐにぐに
ちゅぽ
ちゅぽ

ビクン♡
くるぶしぺろぺろ♡
あ…っ
ぁぁっ
んっ♡
…っ♡
ゴキュ
ごくん
ビクン
じじじ
ガクッ
ガク
ビクン
びゅるるっ
どぴゅ
ビクッ!
ビクッ!
ちゅるん♡
はっ
ひく♡
ひく♡
…っ
ぺろ
ふにゃ♡
ぺろっ
はっ

はー
はー
はー
大丈夫け？
灰島
—うん
！
浴衣…
ごめ…
黒羽っ…
ちゅ
口の中も
おれの味—
またおれ
ばっかり…
ぺろっ

な～んも
ぎゅ～
おれが好きでやってることやぞ～？
浴衣も洗えばいいんやし！
それに
あとでおまえん中
おれでいっぱいにするでのぉ♡

っばか…っ

あとぉ～

おまえのこんな顔

他のだーれにも見せたないもん♡

っ！

くそ…なんか…なんかムカツク

ぐぐぐぐ

なにするんやも～～～～～

なんで嬉しそうなんだよっ

—ほやから部屋で

ゆっくり

焦らんで大丈夫やょ

もうずっと隣におるんやし—

ヒュウウゥ…

おまえを独り占めできないのはもちろんわかってる

おまえの凄さを大声で叫んで世界に知らせたいくらいだから

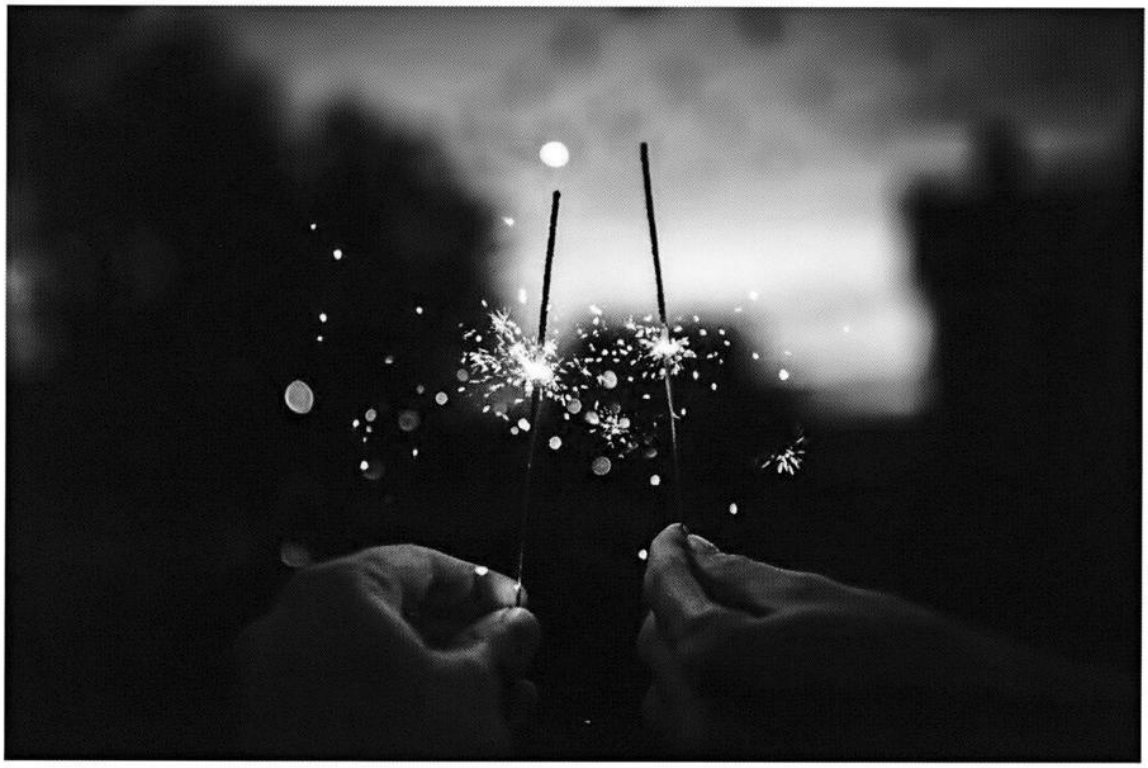
だけど

おれは

おまえのだよ、ユニチカ

完

…すっげえ
当たってんだけど
てか
当て…
ん〜
こーしてればぁ
落ち着くでぇ
大丈夫♥
いやぜってー
ウソだろ
帰ってから
じゃねえのかよ
帰るってぇ
…もうちょい
こーしてたい♥
おまえも
帰るっ
夏の
屋外めちゃ刺されるから
帰るが吉
ムヒα最強
ゆにちか
せっかくイイ
雰囲気でも
男子〜なアホ
やっててほしみ
（末永くお幸せにっ）



未だ熱りさめやらぬ

行間

そうだこの手が悪い、と灰島は思った。思ったから捕まえる。
「おえ？」とかなんか暢気なこえをあげた黒羽に覗き込まれた。
「なんやぁ？」
なんやぁ？じゃねぇよ。なにって、――――は、は、と短く息を継ぎながらなにか言い返したかったけれど、あたまがぼうっとして、思考が纏まらない。ただ、
「……むかつく」
あたまのなかでいちばんひろい面積を占めている感情を短く吐き出して睨んだ。けれど灰島のそんな罵倒にも視線にも慣れている黒羽は、ちょっと眉を下げただけだ。困ったなあ、とでも言いそうなかお、……言いそうだけれど、実際たいして困ってもいなさそうなのも判った。
「おまえいっつもほー言うのぉ」
宥めるみたいに、皺が寄っているのであろう眉間にちゅっとキスを落とされる。慣れた感触にそこが緩んでしまいそうで、意識してぎゅうっと眉を寄せ続けた。ちゅっ、ちゅむ、ちゅ、――――キスは眉間から鼻先、眦、瞼、頬、髪の生え際を辿って耳朶に移動する。ぬるっと舌が耳殻をなぞって、ひ、と悲鳴が上がったのと、ぞくぞくっと背が震えたのとにますますむっとして、自分のうえで好き放題している黒羽の後頭部を叩いた。
「痛っ！……なんなんやもぉ……やっぱり脱がんとあかんのけ」
「はぁ？」

あたまにきていたので、わりと全力で叩いた自覚はある。「おまえ、バレー選手の平手打ちは力士で言ったら張り手と同じやぞ、まじで痛いんやっちゅうの」と以前黒羽に言われたことを思い出した。本気で痛かったらしい黒羽の目が僅かに潤んでいる。それはさておき、――――脱がないとだめ？ってなんだっけ？熱でぼんやりしたあたまをこてんと傾げ、黒羽の、半分乱れた浴衣を見て、ああ、と思い出した。
今日、ふたりで住んでいる部屋の前を流れる川の河川敷、すこし離れてはいるが歩いて行けるくらいの場所を会場にして、花火大会があった。それを知ったのは数日前で、ちょうどオフで予定もなかったから、行きたいとか言われそうだなと思ったのだが、灰島の予想は外れ、珍しく黒羽はこう言った。
「混みそうやのぉ。花火やったらベランダからでも見えるやろ、部屋で見よ」
「うん？……いいけど」
灰島が「珍しい」と思ったのは、黒羽は確かに人混みが苦手だけれど（いまだに東京駅はひとが多すぎて嫌だとか言う）、夏祭りとか花火大会みたいなイベントはすきで、都合がつけば「行こっせ」と誘ってくるのが常だったからだ。ただ、それをくちにはしなかった。まあ出掛けて行かなくてもここから見えるんだし、と思ったのと、――――まるで自分がすごく行きたかったみたいに思われるのはいやだったからだ。
黒羽と出掛けるのがきらいなわけではない、と気付いたのは

いつのことだったか。大学進学を機に上京してきた黒羽は、休みというとあちこちに出掛けたがった。誘われる場所のほとんどに灰島は行ったことがない……どころか、なまえを聴いてもピンとこないことが多くて、「おまえ本当に東京に住んでたんけ、どっこも知らんのやのぉ」と笑われた。

「ほしたら、これからいっぱい行こっせ」

行きたいと思わなかったから行かなかっただけだ。行かなくても困らなかったし、行く理由もなかった。テーマパークも水族館も動物園もプラネタリウムも美術館も、――――博物館だけは恐竜の化石を見に父と行ったことがあったけれど。誘われて初めてその場所を知り、こんなにいろいろあったのかと驚く灰島を見て、やっぱり黒羽は笑っていた。

知らなかった。バレーボールのコート以外に、こんなにいろんなものが周囲にあったことも、――――そこに行って、たのしいなって、思うことも。

でも言わなかった。黒羽と出掛けるのはちょっと、わりと、かなり、楽しい、なんてことも、花火のおともすきだから見るなら近くに行きたい、なんて思ったことも。

「会場には行かんけどぉ、せっかくやし浴衣でも着よっせ」

言わなかったから普段どおりの休日を過ごした。午前中に洗濯やら掃除やらをして、昼を食べに行きつつ買い物をして、帰ってきて夕食を用意した。作業があらかた終わったところで、黒羽が思いついたみたいに言い出したのだ。ゆかた、と脳内で鸚鵡返しにしながら、先日帰省したとき、地元で夏祭りに行ったことを思い出した。ふたりぶんの浴衣を用意してくれた黒羽の母はにこにこして言った。

「チカちゃんに合うように仕立て直したで、浴衣、東京にも持って行ったらいいが。洗濯とか全部祐仁がやるでの」

黒羽によく似たかおで笑うそのひとに、はあ、ととりあえず頷きはしたが、東京に戻る日にはきれいさっぱり忘れていた。ところが東京で黒羽のキャリーケースを開けたら、ふたりぶんの浴衣が出てきたのだ。持って行ったらいいと言われたときには「おれは洗濯係けや」と不満を言っていたのに、と思ったが、「断りきれなかったのかな」と思っていた、のだけれど。

「まあいいけど。洗濯おまえがやれよ」

黒羽の誘いに乗って着て（というか黒羽に着せてもらって）、ベランダに出した椅子に座って夕食にして、花火が終わって部屋に戻ったとき、――――『断り切れなかった』のではなかったのだと気付いた。

「な、着たまましょっせ」

なにを、と訊き返すまえにさっさと眼鏡を奪われてキスをされた。昼間ふたりで部屋にいるときの「ちょお待っとって」とか「ありがとの」のキスと全然深さが違ったから、『なにを』しようと言われたのかなんてすぐ判ったし、そう言えば黒羽は普段と違う格好をしていると興奮する性質だったなと思い出した。黒羽とそういうことをするのがきらいなわけではないし、

ベランダで隣にいた黒羽の、浴衣の襟の合わせ目から覗く鎖骨とか、そのうえに続く健やかなくびだとか、汗が伝ったこめかみだとかにそわっとして、ゆびで触れたいだとか腕を絡めたいだとか舐めたいだとか思っていたから拒む理由はなくて、灰島からも応えてベッドに雪崩れ込んだ。だから別に、きらいなわけではなくて、恥ずかしいとかそういうことでも勿論なくて、黒羽が今「せっかくの浴衣やのにのぉ」とぶつぶつ言うように『着たまま』なのに抵抗があったわけでもない。

「そ、……うじゃ、ねぇっ」

確かに、抱き合うときに服なんか邪魔だなとは思っている。布の感触がほしいわけじゃないからだ。訊いたことがないから黒羽のほうはどうかしらないが、灰島は黒羽の肌の感触がすきだ。くっつくと、ああこれだ、と、理由はよく判らないけれど満たされたきもちになる。自分よりもすこし高い体温。うちがわに熱が籠っているみたいだな、と思う。普段の、へらっと笑っている黒羽は春の陽だまりに似ているけれど、抱き合っているときはそうじゃない。夏の炎天下、プールから上がったときに座る、焼かれたアスファルトを連想する。熱くて、けれどそこに冷えたからだを預けるとぞわりときもちがいい。だから出来ればなんにも着ていないほうがすきだけれど、今その後頭部にスパイクなみの平手を落とした理由はそんなことじゃない。

「そうじゃ、なくて、……おまえばっかり、すんな、……ってっ」

こういうとき、黒羽は無駄に器用だと灰島は思っている。ゆびさきでてのひらでくちびるで舌で歯であしで膝でつまさきで、灰島本人だって覚えていない『きもちいい』を掘り起こしていく。びくんと反応すれば嬉しそうに目を細められるし、悲鳴が漏れれば「今のもう一回聴きたい」と強請られる。普段もそうやって（灰島からすると）いいようにされてしまうし、今日は半端にしか脱いでいない浴衣が腕に絡まったせいで、さらに思うように動けない。きもちいいことがきらいなわけではないけれど、一方的にされるのはなんとも癪に障る。

だから、主犯格である手を捕まえた。こいつさえ好き勝手しなければまだマシだと思ったから。

「手、動かすな。それ以上すんならやめる」

「ええー、無理やげ。あっちこっちさわりたいもん」

黒羽の手首を掴んだ手にちからを込めた。細くもやわらかくもない、てのひらを押し返してくる筋肉としっかりとした骨の感触にまた、そわっとする。そわっ、は腰のあたりに熱を滞らせるから厄介だ。くそ、とくちのなかでだけ悪態を吐く。くそ、くそ、くそ、――――黒羽のくせに。いつもへらへらしてるくせに。いまだにプレッシャーがかかる場面ではサーブをホームランにするくせに。ミスるとすぐかおに出すくせに。出口に迷って東京駅から脱出できないくせに。ゴキブリに悲鳴あげるくせに。豆苗がうまく育たなかったとか言ってしょげてるくせに。くそ、くそ、くそ、くろばの、くせに。

段々何に腹が立ったのかの理由を見失いそうになる。ただあたまにきて、かあって熱が上がる感じがして、その熱が腰に集まって変なふうに焦って、それなのに相変わらず「おれは今とっても困ってます」みたいな、高級だけど間抜けなかおの洋犬――ゴールデンレトリバーとか、なんかそういう感じのやつ――みたいなかおをして覗き込まれるからますます腹がたって、おれだって、という負けず嫌いなきもちが膨らむ。おれだって、おれだって、おれだって――

「判った、じゃあ手ぇ縛ってくれや」

「……はあ？」

おれだって、のあとになんと続けていいのか、あたまに渦巻く苛々の言語化に手間取っていると、ゆるっと笑った黒羽がそんなことを言った。……て？しばる？なにを言われたのか判らずにくびを傾げた灰島のうえで、黒羽がベッドのすぐ脇の床に上半身と、掴まれていないほうの左手を、伸ばす気配がする。さっき黒羽に眼鏡を奪われた裸眼の灰島ではそこになにがあるかはっきり像を象れるわけではないが、そのあたりで浴衣に着替えたのを思い出した。そうだ、畳紙、とかいうやつを置きっぱなしにしていたような――黒羽の動向に目を凝らしていると、果たして黒羽は、しゅるんと細長いなにかを掴んでから灰島と目を合わせた。

「これで、おれの手、縛って？……おれ、我慢できんくて、さわってまうもん」

これ。差し出された、夜のそらを切り取ったみたいな紺いろの細長いものが、和服を着るときの腰紐だと気付く。灰島の浴衣の着付けをするときには使ったけれど、黒羽は着慣れているからか「おれは要らんかなあ」と言って使わず、一本残っていた。ほい、とそれを渡されて、――『手』『縛る』か、と脳内で漢字変換が完了した。完了したけれど、ひとの手なんて縛ったことはないし縛られたこともない。紐を手に逡巡していると、「おれはどっちでもいいんやけどぉ」と口角を持ち上げた黒羽が、乱れた襟元からするんと手を滑り込ませてきた。脇腹を撫で上げられて、胸の先を爪で弾かれる。

「……っひ、あ、っ」

油断していたせいでひっくり返った悲鳴を上げてしまった。楽しそうに眦を緩ませた黒羽を見て、――さっきまであたまを占めていたむかむかとか苛々を思い出す。

くろばの、くせに。

黒羽の胸ぐらを掴んだ。そのまま引っ張って、上に乗っていた黒羽とからだを入れ替える。こういうことするときにこの体勢にあんまりなったことないな、と思ったし、縛ってどうすればいいのかなんて考えてもいなかったけれど、組み敷いてなお楽し気な黒羽を見て、負けず嫌いが再燃した。悪戯してくる手を捕まえ、両の手首を揃えさせてから、腰紐を使ってぐるぐる巻いてみる。目の前でのんびりとゆびを開閉させた黒羽が「こんな緩くていいんけ」と笑ったけれど聴こえないふりをした。

あたまにはきていたけれど、それでも、ボールを扱うおおきなてのひらと長いゆびを傷めそうなことはしたくない。うまく出来たか自信はないが、自由を奪えれば問題ないはずだ。

この手が、好き勝手しなければいいだけで。

「……で？」

「で？」

ぎゅっと結んで、これでよし、と満足し鼻を鳴らしたところで黒羽に言われ、鸚鵡返しにした。――――『で』？くびを傾げると、黒羽が僅かに腰を揺らす。浴衣越しでも判る硬いものを尻に擦りつけられて、ひく、と閉じているそこが蠢いた。

「せんのけ？……手、動かさなかったら、続けてくれるんやろ？」

なあ？と笑って見上げられる。吊り上がったくちの端から犬歯が覗いて、肩甲骨のあたりがびりびりする気がした。くそ、とまた思う。

おれが、おまえのそのかお、わりとすきだなっていうの、知っててしてんのかよ。びりびりがくびを駆け上がり、むかむかと苛々ですでに沸騰しているあたまに到達した。余裕のある表情に悔しくなって、それを崩してやりたくて堪らなくなる。くそ、くそ、くそ、おれだって、おれだって、おれだって。黒羽の膝くらいまでずるずると後退してから、からだを前に倒した。さっき擦り付けられたものが、浴衣の布を押し上げているのが判る。そこに布のうえからがぶりと噛みついた。

「痛っ……、おまえ、もうちょいなんとかならんのけ、それ」

「うるせぇ」

頭上から文句が降ってくるけれどそれすら楽しげに聴こえていらっとする。勢いに任せて浴衣の合わせ目をひらき、黒羽の下着を勝手に引き下ろした。布地が擦れたのだろう、く、と低く喉を鳴らすおとがして、僅かに溜飲が下がる。ぶるりと飛び出してきたものにかおを寄せ、先走りを零すそこにくちびるを触れさせた。そのままくちで蓋をしていくと、引き込んだそれが判りやすく反応する。自分がしたことで黒羽が興奮したんだと思うと、優越感、みたいなものが腹の奥から湧き上がった。いつもされてばかりだけど、――――おれだって、できるし。

とはいえ慣れてない行為に戸惑う。くちに入れただけでは足りないはずだ。こういう意味で自分のものに触れたことはほぼないので、快感を煽る方法は黒羽の手とかくちとか舌を思い出すしかない。たしか、――――朧げな記憶を手繰り寄せ、舌を動かしてみる。手を添えてしたからうえに舐めあげ、くびれのところを舌先でなぞった。ひくん、と反応がかえってくるのに気を良くする。よしよし、間違ってない、と満足して続けた。くちをすぼめて、上下に扱くみたいにして、――――

「はいじま、」

夢中になって舌を動かしていると、掠れたこえで呼ばれた。なに、と訊き返したつもりが、くちに含んだままだったせいで「ぁ、に、」と引っ掛かったおとになる。見上げると、「咥えた

ままでしゃべんなや」と黒羽が眉を下げた。
「舐めてくれんのはいいんやけど、準備どうすんじゃ。おまえ出来んやろ」
じゅんび、と灰島が脳内で繰り返しているあいだに、黒羽が上半身を捻り、拘束されたままの手をベッドと壁の隙間に差し入れた。そこになにがあるかに思い至って、直前に鸚鵡返しにしたことばの意味がかたちになる。部屋の隅にひっそりと常備されているのは、こういう行為をするときに主に黒羽が灰島に対して使うローションのボトルだ。律儀にしまっているのがおかしくて「そんなもん出しとけばいいんじゃねぇの」と言ったとき、『そんなもん』をいつの間にか用意したうえ毎回ちゃんと切らさないようにしている黒羽は「あほけや」と困ったかおで眉を下げていた。
「……できるし、そのくらい」
言われたことばの「どうせ」が引っ掛かって、黒羽のものからくちを外し、反射的にそう言い返した。実際に自分でしたことはないにしても、されたことは数えきれないくらいある。いつもは黒羽が勝手にするから、『準備』どころかそのボトルを開けたことすらないが、「出来ない」と決めつけられたことにむっとした。伸びあがって黒羽の手のなかのローションを奪い取る。腹立ちまぎれに乱暴に外したキャップが手から零れ、床に転がるおとがした。
「冷たっ、」
てのひらに盛大にぶちまけたそれを自身の背後に塗り付けた途端、常にない温度に思わずこえをあげた。え、これいつものと違うのか？と戸惑い、目を細めてヘッドボードに置いたボトルのラベルを確認するが、そもそも『いつも』のローションがどんなものだったかも知らないことに気付く。なんだこれ、と思っていると、黒羽に「あほ、」と笑われた。
「温めもせんといきなり塗るからじゃ。おれ、ちゃんとてのひらであっためてからさわっとるやろ」
確かに、『準備』するまえの黒羽はてのひらでなにやらぬちゅぬちゅおとをたてていたような気もしたが、はっきりとそうだともそうじゃないとも知らない。答えようがないから無視した。手を止めたらまた「どうせ出来んやろ」と言われてしまいそうで焦る。これを塗って、――――どうするんだっけ、確か、……ぬめりの助けを借りて、なかゆびをぐいと押し込んだ。
「……っ？」
第一関節が入ったかどうかのところで、押し込んだゆびは動かなくなった。記憶と現在感じているもののギャップにあたまが混乱する。もしかしてなにか間違っているんだろうか、と必死に思い出そうとしてみるが、今している行為と、いつも黒羽にされている行為に大差はないと思う。同じはずだ、だってローションは今封を切った新品ではなくいつも使っているもの（のはず）だし、黒羽のゆびよりも自分のほうが若干細いのだから入りやすいと思ったのに、なのに、――――なんだこれ。

無理矢理先に進もうとしてもゆびは圧に阻まれてしまう。うまくいかないことに混乱と苛々が募った。とりあえず続けていればなんとかなるのでは、と思い浅いところで必死にゆびを動かすけれど、快感のしっぽも捕まえられない。

「灰島、眉寄っとる。……痛ないけ？」

違和感と僅かな痛みに知らず顰めていた眉間を、上半身を起こした黒羽にゆびさきで撫でられた。縛られたままのくせにそんなことをしてくる余裕があるのか、とカチンと来る。くっそ、なんでおまえばっかりそんないつもどおりなんだよ。ひとりでやっていた行為をずっと見られていたのかと思うと、苛々とむかむかと羞恥とがないまぜのきもちになった。くそ、くそ、くそ、――――くろばのばか。ぐちゃぐちゃにしてやりたくなって、再び黒羽のあしのあいだにかおを伏せる。

僅かにちからを失っていたものが、くちに含んだ途端に熱を漲らせるのにすこし満足した。もっとわけわかんなくなれ、と思って、舌に、くちびるにちからが入る。先端から溢れるものが量を増し、唾液と混じってくちのなかがひどくぬめる。へんなあじ、と眉をしかめたけれど、硬く反り返ったもので上顎を擦るときもちいいことに気付いてからはどうでもよくなった。ああそうだ、黒羽がキスしてくるときよくこのあたりを舐めてくるな、とかぼんやり思う。舌とこれとじゃ全然違うのにな、でもあったかくて、ぬるぬるして、黒羽のだからいっか。上顎から感じる熱に思考がとろとろ溶け出したころ、惰性で動かしていたゆびがある一点を掠めた。途端、瞼の裏にちいさな火花が散る。は、と息を吐こうとしたけれど、くちのなかがいっぱいで逃げ場がない。

「ん、……ふ、ぅっ」

鼻から抜けたこえがへんだななんてあたまのどこかで思う。思ったけれど、ようやく過った快感を追うほうに夢中になった。そうだここだ、と思う。

『ここ』、さわっててもぜんぜん判んなかったのに、黒羽はなんでいつもすぐ見つけられるんだろう。これまでの違和感が嘘のように引いていき、そこに触れるたびにびくびくと腰が揺れた。これまで抵抗しか感じなかったうちがわが、奥へ奥へとゆびを引き込むような動きに変わる。物足りなさを感じて二本目のゆびも押し込んだ。もっと、もっと、もっと、――――黒羽はどうしてただろう、と必死に記憶を辿ってゆびを動かしたけれど、あとすこし、がいろいろ足りない。黒羽のゆびならもっとつよくさわってくれる、黒羽のゆびならもっと奥まで届く、黒羽のゆびならもっとはやく動かせる、黒羽のゆびならもっといっぱいになる。三本目のゆびを受け入れてなお足りないと蠢く粘膜が、きゅうきゅうと強請るようにゆびを食いしめた。

「は、……っ」

足りない、と、もっと、が占めていた灰島のあたまに、熱っぽい黒羽の吐息が聴こえた。感じる場所をつよく押し上げたはずみで腰が揺れ、その揺れが上半身にも伝わり咥えた黒羽のも

のに歯が当たったせいだったが、そんなことを考えられる余裕は灰島にはない。ただ、あ、と、咥えているものがなんだったかに気付いただけだ。

そうだ、黒羽の、――――これを、いれたら。

足りない、もっと、の最適解を見つけたと思った。ちゅぽんとくちから抜いて、口内に残ったぬめりは唾液と一緒にこくんと飲み込む。舌先に苦みが残って、やっぱりへんな味、と思うのに、ちっともいやじゃないのが不思議で、でもなんでだろうなんて考えていられない。足りない、もっと、はやく、はやく、はやく。ずるずると黒羽のうえに圧し掛かる。中途半端に脱げた黒羽の浴衣がもたついて邪魔で、けれど手を縛ってしまったせいで脱がせられない。仕方がないから帯を抜いて前をすべてひらいてやった。うえに跨られても帯を抜かれても前をひらかれてほぼ裸に剥かれても黒羽は特に文句を言わない。寧ろ幸福そうに眦とくちの端を緩めているのが気になって、なに、と掠れたこえで問い質すと、黒羽は「ほやってぇ」とゆるいおとで応じてきた。

「嬉しいやろ。いっつも、おればっかりやなあ、って思ってたんやもん」

うん？とすこし引っ掛かる。おればっかり？なにを言ってるんだこいつは。すこし前までいっぱいいっぱいだった苛々とむかむかが、熱に浮かされたあたまの片隅からひょこっとかおを覗かせた。――――なに言ってんだ、おまえは。

『おればっかり』なのは、いっつも、おれのほうなのに。

ゆびさきで、てのひらでくちびるで舌で歯であしで膝でつまさきで、あれこれされてわけがわからなくなってしまうのも、こういう行為のことじゃなくても、――――テーマパークも水族館も動物園もプラネタリウムも美術館も博物館も、初詣も花見も夏祭りも、バレーボールのコート以外にこんなにいろいろのものが周囲にあったこととか、そこに行くのがたのしいなんてことを教えられるのも、いつもいつも、自分ばかりだ。

「こーいうことしたいって言い出すのも、あっちこっち出かけたいって誘うのも、……おればっかりやろ？灰島からしてくれんの、いいなあ、て、思って、」

ばっかじゃねぇの、と言ってやりたい気がした。おれのほうが、おればっかりって思ってるし。おれのほうが、おまえと一緒にいて楽しいとか、きもちいいとか、もっと、とか、思ってるし。けれどそれらを言語化するのが億劫だった。どうせこいつにそんなこと言ったって、また「ほやってぇ」とか言い返されるだけなんだろう。面倒くせぇ、うるせぇ、――――思い知れ、と思って、笑ったままのくちに咬みついた。

厚い舌を引き込んでぐちゅぐちゅ吸い上げる。馴染んだ温度に夢中になっているうちに、気が付けば攻守が逆転し、吸い上げていたはずの舌に上顎をぞろりと舐めあげられた。やわらかいそれに、あ、やっぱりさっきまでくちに入れてたもののほうがでかいし硬い、と変な感想を抱く。でもこっちのほうが甘い。

さっきの、しょっぱかったしちょっと苦かった。くちにいれるならこっちがいいな、と思いながら、『くちにいれるならこっち』でないほうに手を伸ばす。触れた途端びくんと脈打った熱い塊にゆびを絡め、ぬるぬると滑るそれのうえに腰を落とした。同じようにぬるついた窄まりと触れ合ったせいか、ちゅっ、ちゅっ、と吸い付くようなおとがする。

「……っ、あ、」

くぷりと中心がひらく感覚に、頼りない悲鳴が漏れた。あ、やっぱり全然違う、とまた思う。ゆびなんかじゃ全然足りない。狭いところを押し開かれているのに痛くなくて、きもちよさのメーターがぐんぐん上がる。僅かな息苦しさととんでもない圧迫感はあるけれど、それら全部ひっくるめても『はやくほしい』であたまがいっぱいになった。はやく、はやく、はやく、はやく、――――ぜんぶ。自分を急かす内部のこえに促されて腰を沈めようとするのに、「こら」と黒羽のこえに引き留められる。拘束された腕が、輪を潜らせるみたいに灰島のからだを囲い込んできて、腰紐が絡みついた手首は灰島の尻のしたに滑り込んだ。

「なん、で、……っ」

なんでとめるの、はやく、ぜんぶ。黒羽の手が邪魔して、思うように奥まで入れられない。それが不満で睨みつけた。呆れたみたいに「なんでて、おまえ……」とぼやいた黒羽の額に汗が浮かんでいる。動いてもないのにへんなの、とちらりと思った。視界のまんなか、はあ、と黒羽が荒く息を吐く。

「こっちが必死んなって我慢しとるっちゅうのに……ほんっと、おまえには敵わんわ」

降参や、と目の前の眉が下がる。よく判らないけれど、というかそもそもなにを争っていたのかももうなんだか思い出せないけれど、黒羽が負けを認めたことだけは理解した。灰島の口角が持ち上がる。

「だったら、はやく、ぜんぶ、――――この手、邪魔」

そうだこの手が悪い。うまくちからが入らないゆびさきを動かして、尻のしたの黒羽の手を引っ掻いた。……なんだかさっきも同じようなことを、別の意味で思ったような気がする。ぼんやりとそんなことがあたまを過ったけれど、ぎりぎりと奥歯を噛み締めた黒羽が「この、あほ」と絞り出すように言うが早いか、どすんといちばん奥をつよく突いたせいで思考が霧散した。深く沈めたまま腰を回されて、ぐじゅぐじゅ、潰れた水音がする。痺れたあたまで、ローション、もう冷たくねぇな、なんてどうでもいいことを思った。いいとか、いやとか、もっとかもうやだとか、――――すきとか、勝手にことばが零れる。

求めた以上に返されて、どんどん上がる体温と、きもちよさに怖くなった。もうむり、とからだを捩ったけれど、自分が縛ったせいで出来上がった腕の枷から逃げ出せない。息が出来ないくらいはやく責め立てられたり、逆にゆったり腰を打ち付けられたりして、無理だと思うのとおなじくらい、このままめち

ゃくちゃにされたくなった。腹のなかを蹂躙するだけじゃなくて、もっとあちこちさわってほしい。そう思うのに、灰島が縛ってしまった黒羽の手は、抱きしめてくれるだけで胸にも腹にも解放を待ちわびて震える灰島のものにも伸びてこなくてもどかしい。そんなにつよく縛ったつもりはないし、さっきから黒羽はローションを取ったりできていたのだから、ある程度手は動くのじゃないだろうかとぼんやり思う。背後に手を回し、黒羽の手首の腰紐に爪を引っ掛けてみたが解ける気配は全然なくて、さわってほしい、が加速した。そんなことをしているうちにからだの圧が上がり、それに圧されて涙が滲む。いつもなら黒羽の手に導かれて達しているはずの腰の熱が重苦しい。なんとか解放したくて、起き上がって向き合う体勢の黒羽の腹筋に張りつめたものを擦りつけ、僅かな快感を得ようとして、――そこで、結び目を解くよりも自分でさわればいい、とようやく思いつく。

痛いくらいに勃ちあがったそこに回そうとした手は、まだ背の側にあるうちに黒羽の手に捕まってしまった。なんで、いや、と駄々っ子みたいに灰島があたまを振り立てていると、それを咎めたいのか宥めたいのか、黒羽がしたからやわらかく突き上げてくる。背中側で両手を捕まえられていては逃げようもない。胸を反らしあたまを振って喘いだけれど、上がった体温はうまく逃がせずに灰島のなかに滞った。

「もういや、……やだ、も、だした、い……っ」

こえがみっともなく崩れているのに気付いたけれど、まともなこえの出しかたなど忘れてしまった。たすけて、なんていつもは言わないような甘ったれたことを言ったような気もする。ん、と頷いたくせに、黒羽が灰島の手を離す気配はなかった。

「……なあ、おれのでいくとこ、みせて？」

なに、なにが、なにで、なにを？訊きたかったけれど、「ほやって、いっつもおればっかり灰島に全部持ってかれてまうんやもん」と笑った黒羽に、すこし強く突かれて呼吸がひっくり返った。背後で手を捕まえられているせいで自然に顎があがり、突き上げられるたびにあまい痺れがあたままで貫くような気がする。血流のおとで聴覚が満たされて、周波数の合わないラジオのノイズみたいで、――それらが急に、ぷつん、と糸を切るように途切れた。

「あっ、あ、……だめ、……っだ、あ、なに、……っ――――」

いつものように強烈ななにかが押し寄せるのとは違い、静かに注がれていたものが気付かないうちに満杯になって、仕方なしに溢れるような射精だった。求めていた解放の満足にはほど遠くて、もどかしいまま頂点に追いやられたことに混乱する。そのあいだもゆるゆると律動は続いていて、焦れったさときもちよさが膨らんだ。

「や、……おかし、いっ、……うまく、だせねぇ……っ」

出したはずなのに、全然そんな気がしない。うちがわに熱が籠ってむず痒いような変な感覚がある。いやだ、だしたい、と

ぐずぐずする灰島に、黒羽は「大丈夫やって、ちゃんといけとる」といつもどおりのゆったりしたこえで応じた。
「上手やの。……ひっで可愛い」
嘘吐け、と熱でぼやけるあたまで思う。さっきから涙が止まらないし、鼻がぐずぐず言うし、だらだらと精液を溢している感覚があるし、帯があるせいでぐちゃぐちゃの浴衣はだらしなく腰にひっかかったままだ。でも思ったことを言う余裕はなくて、ただ、うわごとみたいに黒羽を呼んで、おねがい、と繰り返す。なにをどうしてほしいのか自分でも判らない。きもちいいのに満足できなくて、もっとほしくてたまらない。ぼろぼろぐずぐずだらだらぐっちゃぐちゃのまま黒羽を欲しがる自分が、相当みっともない様を晒している自覚はぼんやりあって、それらをすべて黒羽に見られている。
「もっと、……ぜんぶ、よこせ、ってば、――――さわって、手、で」
ん、と応じた黒羽が、今度こそ灰島を捕まえていた手を離した。うしろに引っ張られていたおかげで保っていたバランスが崩れ、反動でべしゃりと黒羽のほうに潰れる。汗ばんだ肩口に同じくらい汗で濡れた額を押し付けて、は、は、と短く息を継いだ。背中のほうでなにかごそごそ動く気配がしたかと思うと、ふわりとおおきなてのひらで頬を包まれる。滲む視界で捉えた手首に腰紐の拘束はない。さっき灰島が手を回したときは結び目がどこかも良く判らなかったのに、黒羽にしてみればあっさり解けるものだったらしい。くそ、と思うけれど、もう一度縛ってやろうなんて考えは浮かばなかった。はやく、はやく、はやく。熱い腕で強く抱きしめてほしいし、長いゆびで余すことなく暴いてほしいし、きもちいいところもそうでないところも、全部全部、そのおおきなてのひらで撫でて、さわってほしい。
「手、――――もう動かしていいんやな？」
拘束する前に、「手を動かすならやめる」と言ったことなど忘れて、うんうんと頷いた。
「いい、から、はやく、……はやく、……っ」
はやくどうしてほしいのか判らないくせに強請った。なんでもいい、黒羽がくれるなら痛くてもくるしくてもなんでもいい、なんて馬鹿なことを思って、めちゃくちゃして、とか馬鹿なことばがくちをついて出る。黒羽が困ったかおをして、ふにゃっと眉を下げた。
「……この、あほ」
頬を包んでいた手の、長いゆびがこめかみに触れてくる。短い髪を耳にかけるみたいな仕草で梳かれて、求めていた激しさとは違うのに何故だかひどく満たされたきもちになった。頬を摺り寄せて、その手のおおきさと温度と匂いに、ああ、くろばだなあ、と思いながらすん、と鼻を鳴らす。黒羽が息を飲み、直後に、はあ、と大きく溜息を吐き出した。
「……ほんっと、おまえには、かなわんわ」
振り回されっぱなしじゃ、とかなんとか続けた黒羽が、ぎゅ

うと抱きしめてくる。相変わらずやわらかく髪を撫でる感触に、
そうだこの手がすきだ、とぽかりと思った。

江森さんが夏っぽい御本を出すとおっしゃっていたので、「夏といえば花火で浴衣ですね！」と秒で食いつきました。そこでうんうんと頷いていただいたので、勢い込んで「せっかく浴衣なら拘束えっちですね！」と続けたのですが、なにか間違っていたような気がします。どうもお邪魔しております行間です。
『夏＝夏祭り＝浴衣＝浴衣といえば腰紐で拘束』の図式は令和には…なかった…？？そうか、『夏＝夏祭り＝浴衣＝お外でえっち』か…と反省しましたが、せっかくなので有言実行で書かせていただきました。拘束と言えばわたし攻めが拘束されてるほうがすきなんだよなーという個人的な萌えもぶっ込みましたがそれはそれこれはこれ。どちらにしろ黒羽が羨ましいだけの展開に、ギリギリと噛み締めた奥歯が削れまくったのでそろそろ歯医者の予約を取らなければいけない気がします。そんなはなしですが、楽しんでいただければ幸いです。

おまけ『願い事なんてないよ。』
七夕×大学生
ゆにちか

お～!!

商店街が七夕仕様や～!

この辺はこーこーやーのやるよな

短冊コーナー
願い事を書こう!(一人一枚まで)
商店会主催

あ! 短冊書こうぜ!

はぁ…願い事…

おねがいごと 自分でやる
世界制覇は 双島

いや何か願い事…

おねがいごと 自分でやる
メシ代かして 世界制覇は 双島

それは直接言えや

めんどくせー おまえだって似た様なモンだろ 当たり前じゃ

おねがいごと
ずっとバレーしたい
黒羽

いっ…いいやろお!!

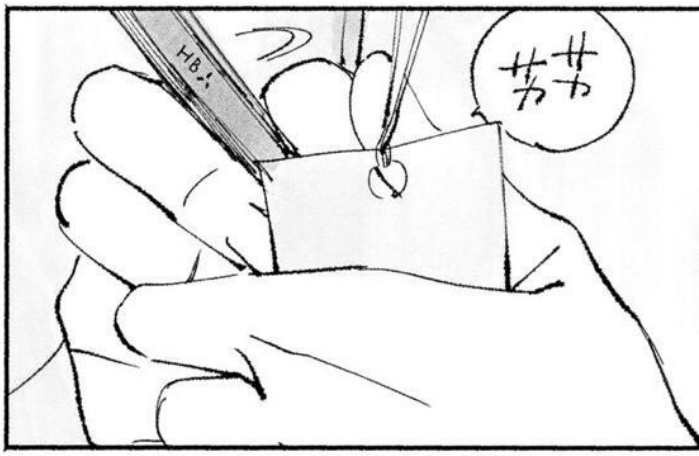
ほらもう行こうぜ

あ〜すまん忘れ物したかもー

ずっとバレーしたい

世界制覇は

お金持ちになりたい



あとがき

さすがに今年は漫画新刊は描いてる時間ないなー
と思っていたのに、出ました。
しかも軽くとは言えゆにちかの初18禁。
尊すぎて絵では描写しきれない、と避けてたところもあります。どれくらいかというと「ちかちゃんのtntnはどのようにあるべきか」を脳内95%占めていて本のタイトルが浮かばなかったくらいには尊いです。
なのでいつもかわいいゆにちかを世に送り出してくださる諸姉にはたいへん感謝を捧げているわけですが、なんと、ゆにちかの沼に沈んだきっかけとなった行間さんに寄稿を頂きました！それもめちゃくちゃえっち、ちかちゃんが、すごい、えっち…！！！(語彙力ですか脳汁に溶けました)黒羽ずるい羨ましい、でもちかちゃんは黒羽だいすき、黒羽だからこそのちかちゃん、うおおおんと遠吠えするしかないです。

＊

今回のお話はゆにちかの日(7月8日)に合わせて寄稿させていただこうかと描き出したものでしたが、えらいページ数あるしどう考えても間に合わないということで改めてコミケ合わせの新刊となりました。紋代町の架空の小さなお祭(花火がやたらゴージャス)を固定の舞台に、浴衣の着付けの話(高1/pixivほか)、着付け後の話(高1/寄稿)、今回の話(幼少～大学)、と3部連作のような形となりました。もちろん捏造てんこ盛りですが、めまぐるしく時が過ぎゆく中でひとつ変わらないイベントがあると急に昔の記憶が蘇ったり、過去と今と未来が地続きであることを認めたり、恥ずかしかったり嬉しかったり、情緒ぐらぐらしませんか。2.43が実際にある土地をモデルに成り立っているのもあり、ゆにちかもそんな日常があるのかなあ、とやたら冷え込む初夏に思い馳せておりました。結果、漫画は進行優先で山なし落ちなしですが。
今後もえがきたいゆにちかがたくさんあるのですが、いずれも長めの話になりそうなのでゆっくり参ります。
ゆにちか本、下手な自分の絵でもいい、ほしい。

＊

最後の最後、入稿直前に七夕の話を増やしました。
吉祥寺とかあの辺りでゆにちかうろついてると思うと張り込みしたくなりますねッ☆

江森

『きらきらこがれてこがして』(2.43/ゆにちか)
発行日：2022/8/13 (COMIC MARKET 100)
発行人(代表)：江森 (BIOTOFU/ビオトフ)

連絡先：biotofu243@gmail.com
Twitter：@EMORI_243 (2.43専用)
pixiv：７７５９８３８

◀匿名でのメッセージ
はこちらへ(マシュマロ)

印刷・製本：プリントオン株式会社
＜装丁＞フルカラー無線綴じ製本(RGB→CMYK)
表紙：コートカード180kg
＋マットPP＋エナメルラメ
遊び紙：ホログラム(スターライトブルー)
本文：コミック紙クリーム

作業MOV：「金田一少年の事件簿(実写初代)」「呪詛」「リコカツ」「MIU」「ハコヅメ(実写)」「VNL2022」huluの契約切り忘れたのでドラマ見まくった。堤さん演出の金田一はもちろん、新作ではハコヅメがよき。

★同人誌であり、内容は全て非公式(UNOFFICIAL FAN BOOK)
★18歳未満：所持・閲覧禁止(FOR ADULT ONRY)
★転載・再配布・複写・改変・撮影・転売…
データ形式問わず全て禁止
(REPOST & REPRODUCT IS PROHIBITED)

☆ 裏表紙のおまけ（ポイピク再録）

・公式の小顔（＝アゴ小さい）設定最高…
・顔のある食べ物が食べられないお年頃（？）

2.43 SEIIN HIGH SCHOOL BOYS VOLLEYBALL TEAM UNOFFICIAL FANBOOK by EMORI

BIOTOFU

YUNI × CHIKA